

蜘蛛研究室彙報(1)

植 村 利 夫

東京市瀧野川區西ヶ原町 310

〔昭和十二年九月十日受領〕

沖縄の蜘蛛(阪口總一郎氏採集)

**On spiders from Island Okinawa collected by
Mr. Soichiro Sakaguchi.**

本年七月下旬から八月上旬にかけて沖縄島を御旅行なされた阪口總一郎氏より同島の蜘蛛類標本を御恵與願つた。該標本は真正蜘蛛類(Araneida)の他にザトウムシ類(Opiliones)の一種を含むものであるが、後者はまだ同定を終つてゐないので後日改めて發表する事とし、此所には取敢へず前者のみを報告しておく事にする。貴重な標本を御恵與下さつた阪口總一郎氏に深甚の謝意を表する次第である。

標本個體數は13頭で次の2科7種に同定する事が出來た。其の中 ARGIOPIDAE の6種は何れも既知種で、最後の *Dolomedes* sp. は今の所未知種であるが、尙精査の上發表の豫定である。前者には御参考までに夫々の分布を附記しておく事にする。

Fam. ARGIOPIDAE (コガネグモ科)

1. *Araneus scylla* (Karsch, 1837) ♀ ヤマシロオニグモ
分布—日本(北海道・本州・四國・九州)
2. *Argiope aemula* (Walckenaer, 1837) ♀ ナガマルコガネ
分布—ヒリビン、オーストロマレーシア、南支那、ビルマ、印度、ニコ

バル群島, セイロン, 日本(臺灣・紅頭嶼・石垣島・八重山島)

3. *Gasteracantha mammosa* L. Koch, 1845 ♀ フタホシトケグモ
分布—印度, ピルマ, スマトラ, ジヤバ, ポルネオ, ニュウギニア, マラッカ, 日本(臺灣・本州)
4. *Leucauge blanda* (L. Koch, 1877) ♀ シロカネグモ
分布—日本(北海道・本州・四國・九州)
5. *Nephila maculata* (Fabricius, 1793) ♀ マダラデヨラウグモ
分布—セイロン, ピルマ, 印度, 支那, オーストラリア, 日本(臺灣・西表島・奄美大島・九州南部)
6. *Tetragnatha japonica* (Boesenberg et Strand, 1903) ♀ ♂ ヤサガタアシナガグモ
分布—日本(本州・四國・九州)
- Fam. PISAURIDAE (キシダグモ科)
7. *Dolomedes* sp. ムナボシハシリグモ(假稱)

キノボリトタテグモの分布

Distribution of a Japanese trap-door spider, *Pachylomerus fragaria*.

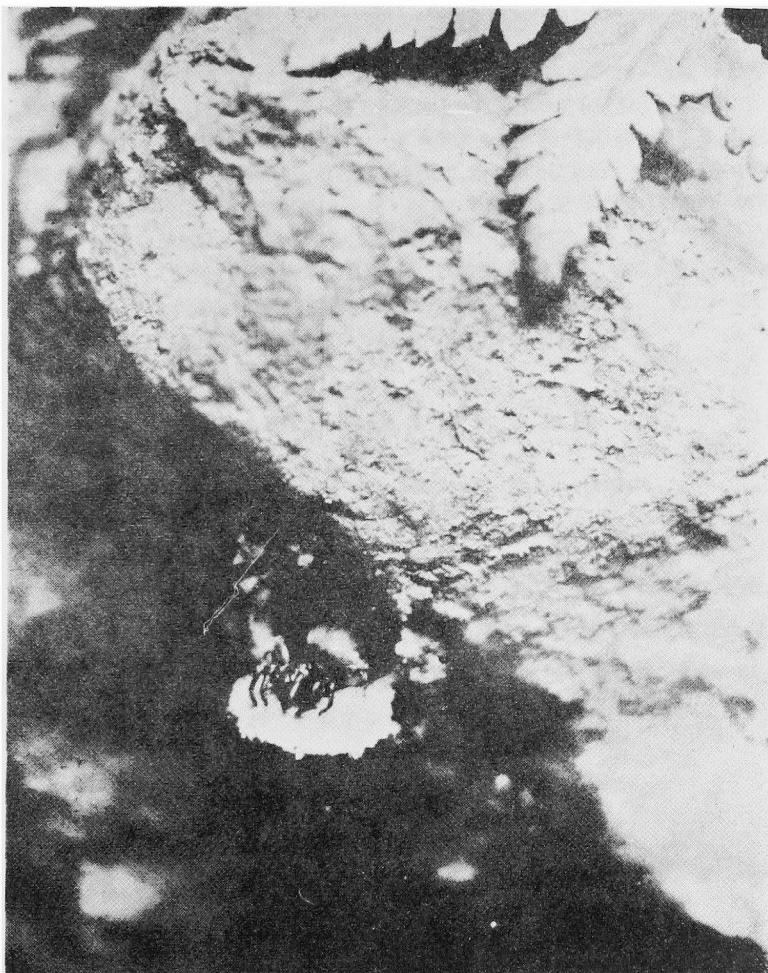
九州佐賀地方より1887年 Doenitz 氏に依つてキノボリトタテグモの一種 *Pachylomerus fragaria* が記載されてゐる事は周知の通りであるが、其の後本種に酷似した種類は廣く九州各地方のみならず本州及淡路島にも分布する事が判明した。今其の中主なる産地を列舉すれば、九州では佐賀の他に宮崎市・福岡縣山門郡城内村・熊本縣大津町(何れも玉寺氏採)本州では和歌山縣那賀郡中野上村(植村採)・大阪府泉州郡南松尾村(八木沼氏及田中氏採)・靜岡縣富士町・大宮町・富士郡傳法村・岩松村・大淵村・庵原郡松野村等(何れも黒澤氏採)淡路島では福良附近(植村採)であるが、尙京都市にも産するやうである。

これ等各地の標本が全部同一種であるか、又 *P. fragaria* に絶対間違ひないかと云ふ點に就ては今こゝに確言を憚るものであるが、何れの地方産のを比較しても只今の所予

Plate VI

キノボリトタテグモ

八木沼 健夫



住居を出でんとするキノボリトタテグモ *Pachylomerus fragariae*.

(大阪府泉北郡南松尾村, 石垣上)

の眼識では別種とすべきだけの差異を認め難いので（随分何回も精査を重ねてみたか）こゝに一先づ同種として其の分布を報告しておく次第である。よつて後日更に深き研究の結果別種とすべき必要を認めた場合には潔く此の記事を訂正する覺悟を有するものであることを附記しておく。

P. fragaria は原記載によると主として杉の樹皮上に生活するものであるが、本州産のものでは樹上生活に限らず其の附近の岩上・石垣上・稀に地中にも營巢する事がある。樹木の種類も杉に限らず柿・ザクロ・カシ・クロガネモチ・楓・樟等種々である。但し九州産のものは王寺氏の御通信によると全て杉又は松の樹上に生活するものばかりであると。これは其の附近的環境（氣温・土質・樹木の老若・苔類着生の有無等）の相違によるのではないかと思ふ。

因に王寺氏よりの最近の御通信によれば九州では本種に寄生する蜂類る多く殆ど絶滅に頻せる感があると云ふ。蜘蛛愛好家の心臓を塞からしめる報告である。何とかよき具合に彼等を保護する方法を講じたいものである。

宮城縣加美郡色麻村の蜘蛛

A list of spiders from Iroasamura, Kamigun, Miyagi Prefecture, Japan.

予は學友山路賀藤次氏より1932年8月宮城縣加美郡色麻村で御採集の蜘蛛類標本を御恵與願つた。此所に其の同定の結果を目録として掲げ、山路氏に深甚謝意を表せんと欲する次第である。尙此の目録の他に種名未定の *Xysticus* sp. のがある。これは後日改めて發表する豫定である。

Fam. ATYPIDAE (チグモ科)

- | | |
|--|-----|
| 1. <i>Atypus karschi</i> Doenitz, 1887 | チグモ |
|--|-----|

Fam. THERIDIIDAE (ヒメグモ科)

- | | |
|--|--------|
| 2. <i>Asagena japonica</i> Doenitz et Strand, 1906 | オスナキグモ |
| 3. <i>Theridion tepidariorum</i> C. L. Koch, 1841 | オホヒメグモ |

Fam. ARGIOPIDAE (コガネグモ科)

- | | |
|---|----------|
| 4. <i>Araneus coruutus</i> Clerck, 1757 | ナカムラオニグモ |
|---|----------|

5. <i>Araneus scylooides</i> Boesenber et Strand, 1906	サツマノミダマシ
6. <i>Argiope bruennichi</i> (Scopoli, 1763)	ナガコガネグモ
7. <i>Cyclosa insulana</i> (Costa, 1834)	シマゴミグモ
8. <i>Leucauge blanda</i> (L. Koch, 1877)	シロカネグモ
9. <i>Meta doenizi</i> Boesenber et Strand, 1906	ドヨウグモ
10. <i>Nephila clavata</i> L. Koch, 1877	デヨラウグモ
11. <i>Tetragnatha praedonia</i> L. Koch, 1877	アシナガグモ

Fam. PISAURIDAE (キシダグモ科)

12. <i>Dolomedes raptor</i> Boesenber et Strand, 1905	ハシリグモ
---	-------

Fam. AGELENIDAE (タナグモ科)

13. <i>Agelena limbata</i> Therell, 1897	クサグモ
14. <i>Agelena opulenta</i> L. Koch, 1877	コクサグモ

Fam. TOMISIDAE (カニグモ科)

15. <i>Misumena tricuspidata</i> (Fabricius, 1775)	ハナグモ
16. <i>Oxytate striatipes</i> L. Koch, 1877	ワカバグモ
17. <i>Synaema japonica</i> Karsch, 1879	フノジグモ
18. <i>Xysticus ephippiatus</i> Simon, 1880	ヤミイロカニグモ

Fam. CLUBIONIDAE (フクログモ科)

19. <i>Chiracanthium japonicum</i> Boesenber et Strand, 1906	カバキコマチグモ
--	----------

海濱に棲むイソハヘトリグモ (新稱)

On a Japanese Salticid spider which lives on seashore.

昭和九年五月初旬は紀州白濱海岸千疊敷の岩上に於て 三頭のハヘトリグモを 採集した事がある。千疊敷と云へば白濱海岸の名勝地の一であるが、満潮時には海水に没し干潮時には硯のかゝる岩石上に 此のハヘトリグモを初めて見出した時は 非常に興味深く感じ、餘念なく其の蜘蛛を追ひまはしたのであつたが、岩石の隙間等に逃げこむので遂に三

頭しか捕へる事が出来ずに引上げたことを今も明らかに記憶してゐる。其の後此の蜘蛛の名稱を知りたいと思つたが、當時は文献も少く、種名不詳のまゝ何處かへ入れてしまつて今は遺憾乍ら行邊不明になつてしまつた。

所が圖らずも昨年王寺幸寛氏より四頭の漬に棲む蜘蛛だとて送つて下さつた標本を拜見するに、予が前に白瀬で採集したものと同一であつたので喜んで再調査してみた所、これなるハヘトリグモは（尙多少の疑問點はあるが）Boeenberg 及 Strand 兩氏の Japancische spinnen に出てゐる *Menemerus himeshimensis* Doenitz e Straud に同定すべきものでからうかとの推定を得た。多年氣にかけてゐた海濱性の蜘蛛の種名を不確か乍らも知る事が出来て予は非常に嬉しく思つた。よつてこゝに一先づ同種として此の報文を記する次第である。*M. himeshimensis* の原記載には分布地として himes Lima (姫島) 及 kurajima の二箇所が上げられてゐるが、王寺氏の採集地は宮崎縣青島及福岡縣兩開村の海岸である。更に予の採集地は紀州であるから本種は廣く内地西南の曖かき海岸の岩石上に分布するものと思つてゐた。而るに最近に至り引續き本種の新產地が二箇所も發見された。其の一は三重縣菅島の海岸（井上操氏採）であり、他は福井縣坂井郡雄島村の海岸（藤田衛氏採）である。特に後者によつて日本海の海岸にも分布する事が判明した次第である。

海岸附近に棲む蜘蛛は相當あるが、眞の海濱性の蜘蛛で他の場所には棲まない種類と云へば極めて少く、文献もあまりない様である。江崎悌三氏は *Dienia* sp. をイソグモの和名のもとに圖を掲げて習性も簡単に述べられてゐる（岩波生物講座、蜘蛛形類）が、此のハヘトリグモの習性も此のイソグモの記事と殆ど同一である。

依つて予は今回上記海濱性の蜘蛛 *Menemessus himeshimensis* ? にイソグモに倣ひてイソハヘトリグモなる新稱を附する事にした。海岸の近くにお出でになる方は是非此のハヘトリグモの習性を深く研究していただきたいと思ふ。

北海道小樽及厚田の蜘蛛

Spidaers from Otaru and Atsuta, Hokkaido, Japan.

予は學友竹原榮氏より1936年初夏小樽市で御採集の蜘蛛類標本を御惠與願つた。此所に其の目録を掲載して同氏に深甚の謝意を表する次第である。目録に掲げた5科7種の中×印を附した二種は北海道から最初の記録である。

Fam. THERIDIIDAE (ヒメグモ科)

1. *Theridion tepidariorum* C. L. Koch, 1841 オホヒメグモ

Fam. ARGIOPIDAE (コガネグモ科)

2. *Araneus cornutus* Clerck, 1757 ナカムラオニグモ
 3. *Araneus marmoreus* Clerck, 1757 キバナオニグモ
 4. *Araneus ventricosus* L. Koch, 1877 オニグモ

Fam. THOMISIDAE (カニグモ科)

5. *Xysticus ephippiatus* Simon, 1880 ヤミイロカニグモ

Fam. ATTIDAE (ハヘトリグモ科)

- ×6. *Yoshiiyea agoana* Kishida, 1913 ヨシイヘハヘトリ

Fam. CLUBIONIDAE (フクログモ科)

- ×7. *Chiracanthium japonicum* Boesenberg et Strand, 1906 カバキコマチグモ

次に石狩國厚田郡厚田村の蜘蛛類6科13種の目録を此所に掲載する。該目録は同地に在住する小生の伯父植村淺之丞氏が1935年7月同村で御採集下さつた標本を同定した結果である。尙此の目録以外に種名未定の *Clubiona* sp. があるが、これは後日改めて發表する豫定である。×印は前目録同様北海道からの新記録である。標本を御恵與下さつた伯父淺之丞氏に深謝の意を捧ぐ。

Fam. THERIDIIDAE (ヒメグモ科)

1. *Theridion tepidariorum* C. L. Koch, 1841 オホヒメグモ

Fam. LINYPHIIDAE (サラグモ科)

2. *Linyphia marginata* C. L. Koch, 1834 サラグモ

Fam. ARGIOPIDAE (コガネグモ科)

3. *Araneus cornutus* Clerck, 1757 ナカムラオニグモ
 ×4. *Araneus scylla* Karsch, 1837 ヤマシロオニグモ
 5. *Araneus ventricosus* (L. Koch, 1877) オニグモ
 6. *Cyclosa atrata* Boesenberg et Strand, 1906 カラスグモ
 7. *Leucauge subblanda* Boesenberg et Strand, 1906 コシロガネグモ

- ×8. *Meta doenitzi* Boesenbergs et Strand, 1906 ドヨウグモ
 9. *Tetragnatha praedonia* L. Koch, 1877 アシナガグモ

Fam. LICOSIDAE (ドクグモ科)

10. *Lycosa T-insignita* Boesenbergs et Strand, 1906 ウヅキドクグモ

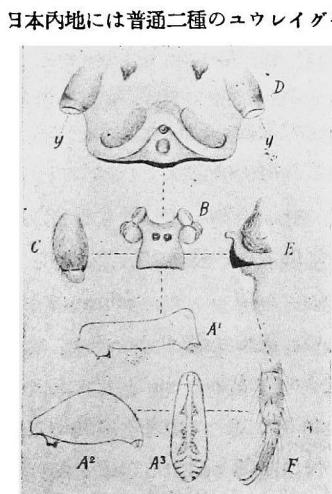
Fam. AGELENIDAE (クサグモ科)

11. *Tegenaria corasides* Boesenbergs et Strand, 1906 カキネグモ
 ×12. *Tegenaria domestica* (Clerck, 1757) イヘタナグモ

Fam. CLUBIONIDAE (フクログモ科)

- ×13. *Chiracanthium japonicum* Boesenbergs et Strand, 1906 カバキコマチグモ

ユウレイグモの正體とイヘユウレイグモ (新稱)

On two Japanese spiders of genus *Pholcus*.

Pholcus crypticolens Boesenbergs et Strand. (命名者原圖)

日本内地には普通二種のユウレイグモ (*Pholcus*) を産する。一は家屋・小屋 便所の隅等に最も多く棲んでゐる黄白色の大形な種であり、他は屋外又は山地の稍薄暗い所に見出される小形な種である。前者は體長 6 mm. 餘りに達し眼丘はさほど高くないが、後者は體長 5 mm. 以下で眼は甚だ高い丘の上に位置し、歩脚には多數の小形な斑紋を有する。さて此の兩種中從來ユウレイグモの和名で *Pholcus crypticolens* Boesenbergs et Strand, 1906 の學名をあてられて來たのは前者即屋内に棲む大形な種の方であつたやうに思ふ。これは多分其の學名の *crypticolens* と云ふ言葉が持つ意味からして眼球の割合突出してゐない方に上記の學名があつて來たのではないかと思ふ。而れども今 *crypticolens* の原記載を讀んでみると眼は甚だ高い丘の上にあると記されており、又歩脚には多數の小形な斑紋・環紋を有し、胸板は褐色で楔形の斑紋を有

する事等も記述されてゐる。而して屋内に棲むユウレイグモは歩脚にも胸板にも殆ど何等の斑紋なく、單眼も目立つて突出してゐない。故に此の方を *crypticola* にあてるのは間違ひではなからうかと思ふ。而して野外に産する方は予の観察では *crypticola* の原文に寸分の違ひもなくあてはまる。故に眞の *crypticola* は此の方であると予は思考するのである。今此所に御参考までに原記載の重要な部分を摘出してみると次の通りである。

Gesamtlänge 5mm. Laenge eines Beines des ersten Paares 26mm. Die hinteren Mittelaugen und die beiderreihigen Seitenaugen stehen auf sehr hohen, blassgelben, fast weissen Huegeln. Die kleinen, vorderen Mittelaugen erscheinen in Spiritus schwarz, die uebrigen Augen weiss. Sternum ist braun mit gelben Keilflecken vor den Coxen und Pars Iabialis, die gegen die Mitte zu gerichtet sind. Die Beine sind blassgelb; alle Femora mit braunen, rundlichen Flecken bestreut (die beiden Vorderpaare dichter als die beiden Hinterpaare) und am Ende breit braun geringelt; die Tibien an der Basis und kurz vor dem Ende braun geringelt, sowie hier und da in der Basalhaelfte mit matten, braunen Flecken bestreut.

(拙譯) 體長 5mm. 第一對歩脚の長さは 26mm. 後列中眼及兩列側眼は甚だ高い帶黃白色の丘の上に位置する。小形な前列中眼は酒精中にては黒色に、其の他の眼は白色に見える。胸板は褐色で基節及下唇部に相對して中央に向つた楔形の黄色斑紋を有する。歩脚は帶黃白色、全腿節には褐色圓形の斑紋が點在し（前二脚は後二脚よりも密に）、端の方には廣い褐色の環紋を有する。脛節は基部と端に近き部分に環紋を有する。故に歩脚の體に近き半分には光澤のない褐色斑紋が此所彼所に散在するわけである。（以上）

腹部の記載は大して重要ではないと思ふから此所には省略するが、以上の原文だけによつて野外に産する小形な方が眞の *crypticola* で、最も普通な屋内に棲む方は別種ではなからうかと云ふ事に推定出来ると思ふ。後者はむしろ歐亞兩大陸の溫帶及亞寒帶に廣く分布する *Pholcus opilionoides* (Schrank) に近似してゐるやうであるがまだ研究はしてゐない。故に今後 *crypticola* の學名は野外産の方にあて、別種の方は學名の決定まで *Pholcus* sp. として取扱つていただきの方が正しいのではないかと思ふ。尙和名によつて兩者を區別する爲に予は今回 *Pholcus* sp. の方にイヘユレイグモの新稱を附する事にした。別に異議がなければ御使用願ひたいと思ふ。尙これは予の獨斷であるかも知れないから、各位の忌憚なき御批評を御願ひ申上ておく次第であります。

Skeptischer Gedanken

福 井 玉 夫

學問は道樂なり？ いつぞやある大學を卒業したてのまだ尻に卵殻のくつゝいてゐる理學士が來た時に、色々の話の末に（學問は道樂だね）と云ふ私の考を申したところ、その男は少し色をなしてそれは云ひ過でしやうと云つた。けれども私の「學問は道樂なり」と云ふ考は其後少しも變らない。道樂と云ふのは一體何かと云ふ事になるが、私はこう考へて居る。即ち「面白くてたまらないから夢中になつてやる事と思ふ。それをやつて名譽を得やうとか金をもうけやうとか、よい位置にありつかうとか云ふやうな所謂野心は毛頭なく損得を離れて楽しむ所に其貢意があると思ふのである。さて翻つて學問を考へて見ると何をやるにしても面白くてたまらず 夢中になつてやると云ふ所に學問の本當の姿が見られるのではないかと思はれる。して見ると學問は道樂なりと斷定しても少しも差支ない。否差支ないのみならず、かやうな態度で學問をする事をむしろ獎勵すべきではないであらうか。本誌の讀者諸君の多數の方は蜘蛛に興味を有して居られ、又それの所謂科學的研究に没頭して居られる方々であらう。が考へて見ると蜘蛛を研究してどんな名譽が與へられるであらうか、又蜘蛛を研究したからと云つてよい位置が與へられるであらうか、或は又蜘蛛を研究して巨萬の富を得る事が出来るだらうか。こんな事はおそらく考へて見た事もないであらうと推察する。して見ると蜘蛛の研究は全くの道樂であつて、最も尊ぶべき境地に於て研究して居られるのである。人間の事だから生きて居る以上食はねばならず、食ふ爲には相當の位置や相當の金も必要である事は、申すまでもない。所が學問をする、本當に學問をすると云ふ事はかやうな方面にはあまり有利な方法ではない。それよりは役に立つ法律でもやつて官吏になれば威張れるだらうし、實業家にでもなつてあの手この手でやれば巨富も積み得やう。そんないやしい一社會はかゝる事に熱心な人間をいやしい人間と云ふ——考は少しもなく蜘蛛の研究をやつて居られる方々は全く敬服に値するのである。之は皮肉でも何でもなく、「學問は道樂なり」と斷定すれば當然得らるべき歸結である。

學問とは何か？ 近頃生物學は著しく進歩したと云ふ事は文に口に度々聞されて來た事であつて私もさうだなと思つてゐる。今日の生物學研究室は十數年前の動物學研究室や植物學研究室とからりと様子が變つてゐる事はたしかで、以前にはアルコホル漬や膜葉

の標本とミクロトームと顯微鏡と書物とがあつたに過ぎないのが、今日は硝子の瓶や管や函が林立して居り、電池や針金が所狭きまで配置されて居ると云つた有様である。論文にした所で種類、構造、分類、分布に就いて述べたものが、實驗の data の表、結果を plot した曲線、それにあてはめた數式と云ふやうなもので頁を占めてゐる。變化して居る事は確である。之を進歩と云ふのである。そして近代生物學をやつてみると稱する人々は分類なんてものは學問じやないと云ふ。たゞ五體を通じて得た事を認識しただけじや學問じやない。かやうな結果はかやうな原因によつて起ると云ふ事又逆にかやうに變化すればかやうな結果が豫測せられると云ふ因果率の闡明が學問であると云ふ。蜘蛛を研究するにしてもたゞ野外で蜘蛛を採集して來て、これは何蜘蛛、あれは何蜘蛛と名を調べる。或は未發表のものであれば新種として名前を附けて發表する。或は又蜘蛛の胃はかくかくの形狀である。蜘蛛は何通りあつて、どの線はどの疣から出て來ると云ふやうな事をやつてもそれは學問じやないと云ふ。何蜘蛛は何故に今日地球上に存在するか、蜘蛛の胃の形狀に種々あるのは如何なる事が原因か、蜘蛛の心臓の搏動は1秒間に何回であつて、溫度を上げ下げすると如何に變化するか、その data を曲線に描くと數式はどうに當はまるか。と云ふやうな事を研究しなければ學問でないと云ふ。即ち學問は自然の存在や現象を説明するものでなくてはならぬ。所が同じ所に棲んで居る蜘蛛にも色々種類がある。何れ1種しか居ないと云ふ事にならないのだらうか。溫度が上ると蜘蛛の活動が盛んになる。何故か？その蜘蛛の原形質の活動がその溫度の時最も都合がよいからである。それで説明になつて居るであらうか。蜘蛛の消化腺にはこれこれの酵素があつたと云ふ事と、この蜘蛛の眼の配列はかくかくであると云ふ事とどこに一體違ひがあるのであらうか。生物學は進歩したと云ふけれども取扱及材料の部分が變り、取扱方に變化が來ただけで、物理學者や化學者から見ればその極めて初步的な方法を借用して居るに過ぎないのであつて、今日著しく進歩したと云はれる物理學ですら少しも自然を説明して居ないので、かくかくの事實を記述 describe して見るに過ぎないと云ふ哲學的考察すら已に相當以前からあるのである。道樂なら何をやつて居たつて人の知つた事じやない、自分が面白くてたまらなければよいのではないか。魚屋の八さんが浪花節をうなつて居るのを低級だなど輕蔑するお邸のお嬢さんの聲樂とやらが何故高級なのであらうか。テクニツクの複雜や困難で高低は決められまい。道樂に學問をやつて居るのはアマチュアだとよく云はれる。學問をやるのに黒人や素人もあるものじやない。尤も學問みたいなものを賣つて飯の種にして居る人間を黒人と云ふのならこれは別問題だけれども。